

わがままな芽

春先、ぶどうの木が目覚まし処理をします。これは早く芽を出させるのと、発芽をそろえることが目的です。石灰窒素肥料の上澄み液を枝や芽に散布すること、目覚まし時計の役割をします。

目覚めた木は、地温の上昇とともに根や木に貯め込んだ栄養分を、枝に芽へと送っていきます。送られてきた養分は枝の中に充満して、芽を大きく膨らませます。この養分が剪定した枝の切り口から滴り落ちることを、私たち農家は春の目覚めと呼んでいます。

枝の中に充満した養分により、一番先端の芽が他の芽より早く発芽して葉を開き、光合成を始めます。続いて先端二、三芽が発芽して葉を大きくします。するとこの新芽たちは驚くことに、「私たちがこの木の養分をすべて賄ってあげる。だから他の芽は目覚めなくてもいいよ」と先端から根元の芽に、養分の流れに逆らって発芽禁止の信号を送ります。

ベリーAではほとんど発生しませんが、大粒系のピオーネや藤稔（ふじみのり）ではこの傾向が強く、新梢部分を長く伸ばすと、必ずといっていいほどの状況が発生します。ほうっておくと新梢では先端の芽は出るが、それより根元に近い芽は発芽しないということがおこります。

芽が出ないということは、実がないことです。ぶどう農家にとって収入減となることから、発芽禁止の信号が伝わらないように、芽の先五ミリほどのところに、専用の鋏やのこぎりで深さ五ミリの傷をつけます。これを芽傷処理と呼びます。

それにしてもなんというわがままな芽なんでしょう。送られてきた養分を、自分だけのものにして他の芽は目覚めなくてはいいいとは……。

先端の芽と芽傷を入れた芽の生育が著しく異なると作業が揃いません。このため芽傷を入れた芽が膨らんでくると、先端のわがままな芽を取ってしまします。ところが、ここでまた問題が発生します。わがままな芽は枝の養分の牽引役を担っているので、引っ張り役がいなくなるとそれまで順調に膨らんでいた、芽傷を入れた芽の成長がスピードダウンします。

自然の摂理は複雑です。先端の芽は、木が蓄えていた養分を独り占めして、他の芽を出さないように信号を出します。といってその芽を取ってしまうと、成長が遅くなります。農家としてはどうすればいいのか、頭の痛い問題です。

人の世にもこのようなことが見られます。わがままな芽は、積極的で声が大きく、少し乱暴で市民から少し嫌がられているが、一般人にはないリーダーシップを持っている、利益誘導に力を発揮する個性の強い政治家タイプです。

そう考えると、何かわがままな芽もなくてはないのかなと思えてきます。なんとかこの芽と仲良くやっていけるようになる、私のぶどう栽培技術も向上するのかも知れません。